

『徒然草』第二二段の研究

● 土 屋 博 映

一、はじめに

『徒然草』第二二段は、古き良き時代へのあこがれが述べられている段である。こういう郷愁的な感慨は、人間誰でも持つものである。それは時代により、人間により、具体的な内容は異なるものである。本書の作者である兼好法師は、この段を、どのような郷愁を持って描いたのか、またその郷愁とはどのようなものであるのか、第一に、それを考えてみたい。

また、本書は、基本原則として、冒頭の第一段から、順番に書き続けられたものと言われている。その通説を前提とした場合、本段の位置はどのようなものになるのかを、次に考えてみたい。それは、前を受ける場合と、後に続く場合の二つとの関連である。

本段の成立は、それまでの各段のいかなる思考の推移から成り立つのか、どのような関連があるのかが、一つの問題。そして、それ以後の各段にどのような影響を与えているのか、どのような関連があるのかが、もう一つの問題となる。

以上の問題点を出来る限り解明するのが本稿の目的である。

二、本文の検討

1、本文全文（『日本古典文学全集『徒然草』・小学館』による）

①なに事も、古き世のみぞしたはしき。②今様は無下にいやしくこそなりゆくめれ。③かの木の道のたくみの造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

④文の詞などぞ、昔の反故どもはいみじき。⑤ただ言ふ言葉も口をうしうこそなりもてゆくなれ。⑥「いにしへは、車もたげよ、火かかげよ、とこそ言ひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ。⑦主殿寮人数たて、と言ふべきを、たちあかししろくせよ、と言ひ、最勝講御聴聞所なるをば、御講の慮、とこそ言ふを、かうろ、と言ふ、くちをし」とぞ、古き人は仰せられし。（※①～⑦は筆者による）

2、各文の検討

①なに事も、古き世のみぞしたはしき。

特に注を加えることもない。この世における何事も、古い昔がなつかしく思われる、といのである。「懐古趣味」という一言で片づけるのもおかしいが、そういう趣旨である。以下、①を主題に本段は展開していく。

②今様は無下にいやしくこそなりゆくめれ。

「今様」は、今風、現代風である。「無下に」で「いやしく」を強調している。協調の「こそ」の存在に、この一文の作者の気持ちがあらわれている。①と真逆の現代の「下品さ」が作者には

我慢ならないのである。

③かの木の道のたくみの造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

「かの」については、あの、有名な、程度にとらえておく。とくに指示語というわけではない。木工に関わる職人が作る美しい作品についても、古風なものがよく見えるというのである。①の代表として、まず木工が取り上げられたのは、当時、木工が時代の花形だったからであろう。いづれにせよ、③は、①の補足であり、強調である。

④文の詞などぞ、昔の反故どもはいみじき。

「文の詞」は、手紙の言葉と考えておく。その言葉も、昔の反故に書かれたものはすばらしい、というのである。これも①の例としてあげられたものである。木工も手紙も、昔がいい、というのである。

⑤ただ言ふ言葉も口をしうこそなりもてゆくなれ。

「ただ」は、「直接」ともとれるし、「普通に」ともとれる。どちらにせよ、「言ふ言葉」とは④の「文の詞」に対する、話し言葉のことを述べている。これは昔がよいということを前提に、話し言葉はどんどんみじめなものになっていくというのである

⑥「いにしへは、車もたげよ、火かかげよ、とこそ言ひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ。

ここは、その話し言葉から、高貴な場所での発言での、悪い例をあげる。ただし、これは⑦でわかるように、「古き人」による発言の一部分である。便宜上⑥と⑦に分けたが、本来は会話で一つの世界を形作っていることを確認しておく。「もたげよ」と「かかげよ」が、古くから伝わる伝統的な話し言葉で、「もてあげよ」「かきあげよ」が、現在使われる悪い言葉という論である。

⑦主殿寮人数たて、と言ふべきを、たちあかししろくせよ、と言ひ、最勝講御聴聞所なるをば、御講の盧、とこそ言ふを、かうろ、と言ふ、くちをし」とぞ、古き人は仰せられし。

⑥の続き、内容は、当然ながら、⑥と同じである。本来の言い方と比較し、現代の言い方を非難している。ただし、それは「古き人」の言葉を使って、作者の意見に取り込んでいるという形式をとっている。

本段の構成は、冒頭の一文①を主題とし、それをもとに、古代へのあこがれと、その裏返し。現代への幻滅感が述べられ、最終的に「古き人」の意見をとりあげ、主題を補強したものとなっている。

三、各説の検討

1、「全集」^(注1)

「全集」頭注には、次のように記されている。

「なに事も、古き世のみぞしたはしき」という、古代に対する強烈な憧憬の念は、同時に兼好の生きた当代・近代に対する嫌悪と結びつく。貴族社会の没落期に貴族社会圏の末端にいた

彼には、遁世の後にも、古代をのりこえる眼はすぐには形成されない。この部分の、比較的弱い情趣的な対象把握と、この一言とは深い関係がある。（「全集」頭注）

傍線部分「古代に対する」の一文には共感する。「古き世」にあこがれるということは、「今の世」に嫌悪感を持っているからであることは当然である。

傍線部分「情趣的な対象把握」もその通りである。本段では、感情的に「古き世」が「したはしき」なのである。

2、「全注釈 上」^(注2)

「全注釈 上」には、次のように記されている。

兼好の尚古的、伝統的保守的傾向のはっきりと現れている段である。冒頭の一文に率直に披歴した後、それをさまざまな事例の上実証してゆく構想である。そして、「古き世」「古代」に対する「今様」の「いやしく」「くちをし」となっているのを強調するに至っている。二つの段落のうち、前では一般的にいい、後では、特に消息文・談話語のことばの問題を取り上げて、そこに失われてゆく「古」「昔」を、「古き人」の仰せ言によって愛惜しているのである。（全注釈 上）

傍線部分「尚古的、伝統的保守的傾向」「冒頭の一文～」「前では～」、すべてその通りである。とくに「前では～」の、二つの段落が、「前では一般的に」「後では、特に消息文・談話後のことば」とあるのは注目したい。作者の尚古趣味は自明のことだが、ここではとくに「話し言葉」に目をむけたということである。

3、「諸注集成」^(注3)

この段では、古代の美という意識にたち、言葉づかいの変遷を嘆いている。しかし、慨嘆すべきほどのものではない（佐野）し、また一種の尚古趣味（塚本・三谷）にすぎない（松尾）ともいわれる。ともあれ、筆の動きは軽く、いかにも考証的な随筆をなしていると思われる。（諸注集成）

傍線部分「古代の美～」以下で「嘆いている」まで言えるのかという問題がある。また「筆の動きは～」以下は主観的で、はたしてその通りかと言う疑問は残る。「筆の動きは軽く」は主観的であり、評価の意味をなしていない。「いかにも考証的」とあるが、考証的というほどではない。

この段は、冒頭の「何事も」に象徴されるように、本段までの、執筆の流れにより、「古き世のみぞしたはしき」と、思いついたほどのものと考えておきたい。冒頭のテーマである、一文の捉え方に要注意である。

4、「講座 第二巻」^(注4)

平安文化にあこがれる兼好の尚古趣味のよくあらわれている文であるといわれている。一四段でも兼好は同様の主旨のことを述べているが、用語の変わらぬはずの歌できえ今の歌には余韻がなくなると嘆く。（講座）

傍線部分、「平安文化にあこがれる」と「平安文化」いう風に、範囲を限定して安直に決めつけていいものかという疑問が残る。「一四段～」では第一四段との関連を述べているが、この点については、賛意を示すと同時に注目しておきたい。

次に、第一四段を掲げておく。

「和歌こそなほをかきものなれ。あやしの山がつのしわざも、いひ出でつればおもしろく、おそろしき猪のししも、『ふす猪の床』といへば、やさしくなりぬ。

この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし。貫之が「糸による物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌屑とかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがた・言葉、このたぐひのみ多し。この歌に限りてかくいひたてられたるも知りがたし。源氏物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。新古今には、「のこる松さへ峰にきびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ、仰せ下されける由、家長が日記には書けり。

歌の道のみ、いにしへに変らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ。

梁塵秘抄のえい曲の言葉こそ、また、あはれなる事は多かめれ。昔の人は、ただいかに言ひすてたることくさも、皆いみじく聞ゆるにや」（第一四段）

第一四段は、「和歌」限定の一段であるが、傍線部を見れば、本稿で取り扱う第二二段と発想が同一であることは明らかである。「この比の歌」「古き歌ども」「今の世の人」「その世の歌」「いにしへ」「今」「昔の人」「昔の人」と、今と昔を意味する言葉が連続する。

言えることは、いわゆる第一部（序段・第一段～第三〇段あたり）の根底には、尚古趣味が敷き詰められているということなのである。それが本段で、顕現したということになる。

四、前後の段の検討

1、人は己をつづまやかにし、奢りを退けて、財をもたず、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしたがへる貯へもなく、水をも手して捧げて飲みけるを見て、なりひさこといふ物を人の得させたりければ、ある時、木の枝にかけたりけるが、風にふかれて鳴りけるを、かしかましとて捨てつ。また手に拵びてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。孫震は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらの人は、語りも伝ふべからず。（第一八段）

傍線部分から、「賢き人」が裕福であることは少ないという主張が見られ、「唐土」の賢人、「許由」と「孫震」の二人を例としてあげて、称えている。

さらに、「唐土の人」と「これらの人」とを対比し、間接的に「これらの人」を非難している。「これらの人」は「日本人」であり、「唐土」という空間的に離れた国をたたえているわけで、この対比は、「今」と「昔」の対比にオーバーラップする。

2、折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

「ものあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮きたつものは、春の気色にこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日

影に、垣根の草もえいづるころより、やや春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつづきて、心あわたたく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心のみぞ悩ます。花橋は名にこそおへれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひすてがたきこと多し。

「灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたたくなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつづくれれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさおとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく澄める、廿日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、真にやんごとなき。公事も繁く、春の急ぎにとり重ねて催し行はるるさまぞ、いみじきや。追灘より四方拜につづくこそ、面白けれ。晦日の夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たたき走りありきて、何事にかあらん、ことごとしくののしりて、足を空にまどふが、暁がたより、さすがに音なく成りぬるこそ、年の名残も心ぼそけれ。亡き人のくる夜とて魂まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。(第一九段)

第一九段の内容は、冒頭の一文、「折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ」につきる。とくに、傍線部「あはれなり」という言葉に注意したい。ここでは「あはれ」も含めて6回用いられている。冒頭の一文末の一文も「あはれなり」であり、照応している。直接的には、記されていないが、暗に「あはれ」の時代であった、貴族の時代を意識していることは間違いない。傍線部「いにしへ」の存在、「をかし」が3例あることにも注意しておきたい。

3、なにがしとかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。(第二〇段)

傍線部分「空」は第一九段の末尾「かくて明けゆく空の気色」からの連想であろう。そういう意味では貴族の美的感覚と通じる思想が垣間見られる。

4、万のことは、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそなほあはれなれ」とあらそひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「元・湘日夜東に流れ去る。愁人の為にとどまること少時もせず」

といへる詩を見侍りしこそ、哀なりしか。径康も、「山沢にあそびて、魚鳥を見れば心たのしぶ」といへり。人とほく、水清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。(第二段)

第一九段の流れが第二〇段に続き、第二一段もそれを受けていると考えられる。

第一九段が四季折々の「自然」の美しさを述べ、第二〇段はそこから、「空」を思い浮かべ、第二一段では、冒頭傍線部、「万のことは、月見るにこそ慰むものなれ」とあるように、まず「月」を、続いて「露」、「花」「風」へと発展し。最後は「清く流るる水」へとたどりつく。そこで浮かんだのが、漢詩であり、竹林の七賢である嵇康である。

末尾の傍線部分「人とほく～」で「心なぐさむ」とあるのには注目したい。作者の、本書執筆動機の一つと考えられるのが「つれづれ」を「なぐさむ」ことであつたからである。

「人とほく、水清き所にさまよひありきたる」が、その動機の解決案の一つとなった。「人とほく」とは、俗世間の俗人から離れて、ということであろう。

傍線部「あはれ」が3例、「をかし」が1例用いられていることにも注意したい。

以上の流れを受けて、次の「5」にあたる本段、第二二段が記されている。

5、何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は、無下にいやしくこそ成りゆくめれ。かの木の道の匠の造れる、うつくしきうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞などぞ、昔の反故どもはいみじき。ただいふ言葉も、口をしようこそなりもてゆくなれ。いにしへは、「車もたげよ」、「火かかげよ」、とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」といふ。「主殿寮人数だて」と言ふべきを、「たちあかししろくせよ」と言ひ、最勝講の御聴聞所なるをば、「御講の廬」とこそ言ふを、「かうろ」と言ふ、くちをしとぞ、古き人はおほせられし。(第二二段)

第一四段を含み、本稿で取り上げた第一八段以下、本段まで、連想が続いていることが確認された。「つれづれ」を「なぐさむ」ためには、何があるのかと模索し、第一九段を経て、「何事も」、「古き世のみぞしたはしき」という一応の結論にたどりついたということがいえる。「うつは物」から「反故」を経て、最終的に「ただいふ言葉」に目をむける。「ただいふ言葉」は「日常」ととらえたい。日常についても「古き世のみぞしたはしき」ということであろう。

6、衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。

露台・朝がれひ・何殿・何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小部・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜御殿のをば、「かいたもしとうよ」などいふ、まためでたし。上卿の、陣にて事おこなへるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔に、なれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、ここかしこに睡り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴のおとは、めでたく優なるものなり」とぞ、徳大寺太政大臣はおほせられける。(第二三段)

第二二段の、貴人の家の「ただいふ言葉」からの流れで、「衰へたる末の世」と一応の判断をしたが、傍線部にあるように「九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。」へと連想は続く。さらに傍線部、「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜御殿のをば、「かいたもしとうよ」などいふ、まためでたし。」も第二二段の「ただいふ言葉」との関連をうかがわせる。この世は、ほとんど幻滅感をいだく状態だが、「九重」だけは違うと、今のこの世では

ほとんど存在しない、作者のオアシスを「九重」に見出しているのである。

7、齊王の、野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは覚えしか。〔経〕・〔仏〕など忌みて、〔なかご〕、〔染紙〕などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。(第二四段)

傍線部「齊王～」以下、前段の「九重」との関連があり、つづく「なかご」「染紙」は第二二段の「ただいふ言葉」との関連がある。さらには、傍線部「神の社～」以下、「九重」との関連性を物語っている。傍線部「をかし」が2例存在することについても注意しておきたい。

8、飛鳥川の淵瀬ならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、樂しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやん事なかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とどまり事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂の作りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の比、南門は焼けぬ。金堂はそののち倒れふしたるままにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。行成大納言の額書ける扉、なほあざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、いまだ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづからあやしき礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、万に見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。(第二五段)

第二五段は、本書中、最初に「無常観」を示す段として有名である。直前の第二四段まで現世に幻滅感を抱いていた作者は、いにしえにあこがれた。そこで立ち止まったのがこの第二五段であると考えたい。冒頭の傍線部「飛鳥川の～」と「桃李ものいはねば～」は世の中の変化が空間的に把握されて、『方丈記』の冒頭部分をオーバーラップさせるかのごとくである。

本稿では、第二五段については、第二四段までの流れを受けて成立したろうことを述べるにとどめ、別の機会に考えを公にしたい。言えることは、それまでの流れをうけてはいても、ここで振り返って新たな思想に到達した意味合いが深いということである。作者の思想の遍歴として、重要な段といえるだろう。

五、結論

本段の尚古趣味は、冒頭から、各段の文章の根底に存在し続けているものである。

「講座」に記されていたように、第一四段は、尚古趣味が「和歌」について顕現しており、本段との思想的関連は当然存在する。

前後の段との検討でも、時間的な関連が、空間的な関連として、姿を現したりする。尚古趣味なのだが、時間だけではなく、離れた異国をよしとする発想もあると思われる。

作者の脳裏には、現在という今の時間に対する失望感があり、歴史と伝統を持つ、過去という過ぎ去った時間への憧憬がある。それに加えて、此処という現在地への失望感もあるようだ。そ

して、歴史と伝統を持つ、離れた空間・異文化への憧憬もあると思われる。

冒頭の、「何事も、古き世のみぞしたはしき」には注意したい。「何事も」は当初、あまり気に留めていなかったのであるが、検討を続けるうちに、意外と無視できないことに気がついた。「何事も」は、それまでの流れを受けて表現する言葉である。続く「古き世のみぞしたはしき」という考えが、そこで忽然と浮かんだということであろう。

第二二段は、それまで、作者の心中にくすぶっていたものが、明確に「古き世のみぞしたはしき。」と表現された点で重要である。

そこから、作者は具体的にその例をあげる。「うつは物」「反故」、そして「ただいふ言葉」である。話し言葉に目を向けた作者は、第二三段の「九重」、さらに第二四段の「齊王」「神の社」へと視点を移す。

「古き世のみぞしたはしき」と古代にあこがれる彼は、この世に、「九重」「齊王」「神の社」と、神の領域のみ、その「古代」が残されていることに気が付くのである。

結論として、第二二段、第二三段、第二四段は、連続して執筆された可能性が高い。「古き世」にあこがれた作者だが、神の領域だけはまだ捨てたものではないという主張である。第二二段の位置は、彼の「古代」志向を示すものの、総まとめとして重要であるといえる。

(注1) 日本古典文学全集『徒然草』(小学館)

(注2) 『徒然草 全注釈 上』(角川書店)

(注3) 『徒然草 諸注集成』(右文書院)

(注4) 『講座 徒然草 第二巻』(有精堂)